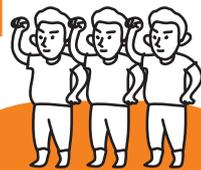


WAKKA MONO



2009.01

図解「若者集会」



若者集会宣言

若者たちの
全てが見えてくる
5年間の記録

スポーツ・交流・勉強・ディスカッション・
笑い・不安・戸惑い・絆・信念・仲間・
エネルギー・エネルギー・エネルギー
全てひっくるめて若者集会

何度でもよく見てみよう

若者なんだから

失敗が栄誉です



04 突撃取材 行ってきました!
2008 若者集会
東北集会 谷口 葉子
九州若会 吉村 真理子

06

08 コラム 体感! 東北若者集会
富田 百合子/山本 謙治

09 **東北若者集会 2004 ~ 2007**

14 WAKAMONO VOICE

15 **九州若者集会 2005 ~ 2007**

20 顔を合わせるから発展する
未来を創造する力 伊藤 幸蔵
農家に人材がない 後藤 和明

22 **DATA で見えてみよう**
若者集会を取りまく環境

表紙写真 / 2005年九州若者集会、バレーボール@レンコン畑で優勝した「チーム水の子会」

誰もしていない有機農業、信念を買った親父は
かっこよかった。かあちゃんたちのおかげで、家
族が好きで、土地が好きで、気づいたら親父が耕
していた大地に立っていた。

始める前は、いい野菜作って、都会の消費者に
喜ばれ、いい車に乗って、親孝行するんだ、と。稼
ぐ夢は無限大、でも親父との技術と経験差は30年。
苗づくり、定植、堆肥づくりに病害虫管理、
追肥・収穫・選果…お金にする道のりが無限に思
える焦燥感。時間はあるはずなのに、やる気はあ
ったはずなのに、ふと一人になると不安になる。

そんなとき参加した若者集会。

若さは恥ずかしくないんだ、みんな悩んでいる
んだ、なんだよそんなやり方あるんじゃないか。
焦燥感から、10年先を見られる自分を発見した。

ワザ(技)を磨きあう弾ける出会い。きつと地
元で活躍する有機農家になるんだ。仲間が自信を
くれる、「若者集会」という始まったばかりの伝説。
ひとりではない、仲間がいるからあきらめない。

ひとりではない 仲間が自信をくれる

写真: 成神利美 2006年東北若者集会にて



2008 東北集会

2008年9月6・7日
秋田県南秋田郡大潟村
参加人数：62名



写真：山本謙治

考えてるより、やってみれば 楽しいんじゃないかねえか？



集会史上初の「展望台駐車場集合」という屋外でのスタート。らでいっしゅばーやのぼりを立てて待つ。米農家が多いのが東北の特徴。大潟村のベジタブルスタイル富田さんの田んぼ見学では、参加者が田んぼの土を手にとり舐めてみたり、まるで勉強会。話の内容はよくわからなくてもモノづくりの確かな技術と思いは配送スタッフも感じ取っていた。スポーツ交流は世話人たつての希望でフットサルに。準備運動も念入りに、本気度は高い。汗をかき、温泉に入り、杯をかむ。そして仲間意識。舞台が整えば初参加でも打ち解けてグループワークに溶け込む、その速度は若手はやはり速い。集会終了後は、こちらも集会史上初の配送スタッフによる援農。稲刈り前のひえ刈りを体験。



グループワークテーマ
[Happy Project]
写メ定時観測、
RadixのSNSってどうだろう
スケジュール：1日目 集合/大潟村を眺望、歴史を学ぶ。お話しと田んぼ見学/スポーツ交流(夕食メインお肉争奪フットサル)/温泉/バーベキュー/ホテルでの第二次交流会
2日目 グループワーク/閉会後のオプション ベジタブルスタイルさんの田んぼのひえ刈り体験



理由よりも知覚でハッピーに

キーワードは、若者、異業種交流、未利用資源、ハッピープロジェクト、大潟村……etc. 何かおもしろそうないがするもの、この企画はいつたい何だろう、と、期待と不安の渦に巻かれつつ、参加を決めました。当日もスタート時点から、数々の謎に遭遇しました。謎、その一。集会場所が寒風山の頂上付近。もし、雨が降ったら？謎、その二。スポーツ交流の種目が、フットサル。女性や年配者に不公平では？等々。後で気づいたのは、そんな「なぜ？」という思い自体がナンセンスだったということ。当日は曇り空でしたが、展望台から広大な大潟村を見渡すことができて爽快でした。フットサルも、私のような初心者でもやればできるものです。楽しく汗をかき、一緒に戦うことで、出会った人との距離が一気に縮まりもします。

誰かがポロっと口にしてた、「やってみれば、楽しいんじゃないかねえか」。「雨が降ったら大変」よりも「実現できれば楽しい」を優先させる。頭で考える理由よりも、楽しさや嬉しさといった知覚の欲求に対して正直になること。一段上のハッピーを味わうことができただけです。何かトラブルが起きれば、知恵を合わせて乗り越えたい。若者には、多少のトラブルを切り抜ける体力と柔軟性があります。

翌日は、インターネットを用いた交流の可能性について話し合う「ハッピープロジェクト」が行なわれました。その進め方は、極めてポトムアップ。まずはグループで自由に意見を出し合い、いくつかの内容に集約します。次に意見をストーリー立てし、具体的な提案として形にします。最後にはプレゼンテーション。すぐにも実現できそうなものから願望に近いもの(?)まで、様々な意見が出されました。

共振り、うねりをおこす

世の中では、対立を恐れて自己主張を避ける若者に批判の目が向けられています。でも、集いで会った若い農家の方々は、自分の考えをしっかりと持ち、はっきりとそれを表現していました。また、参加された配送スタッフや、らでいっしゅばーや会員の方々も、明日の農業や人々の幸せのために、「自分は何ができるのか」を考え、それを実行に移すことへの思いを語ってくれました。

ここに集まった人々は世間ではマイノリティーに属するのかもしれませんが、でも集いで同じ志を持った仲間がいることを実感し、相手の意見に共感したりそれを感じたりすること、大きな充実感が得られたのではないのでしょうか。これは、頭ではなく心でつくられた、共振という名のハッピーでした。

一見、非合理。でも、結果オーライ。若者集会はいつか世の中に大きなうねりを起こすような予感がします。



Yoko Taniguchi
谷口 葉子
宮城大学 食産業学部
フードビジネス学科助教
京都府出身。有機食品を中心に、持続可能な方法により生産された食品の流通システムの研究に取り組む。

2008九州集会

2008年8月2・3日
福岡県柳川市
参加人数：70名



誤摩化すことなく正直に 生きる人は、かっこいい

日本のよき伝統文化と歴史、そしてそこにある有形無形の宝ものに触れ、今後に生かす機会になれば…。400年の干拓の歴史を持つ柳川。町を守り、人を守り、農地を守ってきた水路と親むべく地元のお祭りに参加。川下りのどんこ船を使ったレースに、即席7チームが練習なしで漕ぎ出す。蛇行しつつも全チーム完走。「お堀の夕べ」ではいつもの川下りにおつまみがふるまわれ、幹事は乗船間際に慌ててお酒を買いに走った。約一時間の川下りに「気持ちいい〜」。翌日は有明海を育てる会会長の近藤潤三さんから、有明海が直面する環境問題について学び、グループワークでは、本州がメインのらでいっしゅぼーやの会員さんに「九州をもっとアピールするには？」という提案「Happy Project九州版」を募り、発表もあった。

暑い暑い九州の若者たち

2008年の春、はじめて「らでいっしゅぼーや」の取材で、Radixの会の仕事をさせてもらった。この時は、事務局の竹内さんと一緒にまわったのだが、この竹内さんという人間、というより、らでいっしゅぼーやと生産者にまず驚かされた。

「はじめのころは、有機農業をやっている人なんてまだまだ少なかったから、とにかく出たもの全部買い取るから農業や化学肥料を使わないでつくってくれて、農家さんを説得してまわったんだよ」

とにかく何か熱いのだ。その熱さは、九州集會に参加した、スタッフたちからも感じられた。早朝干満の差を見に行った時、有明海にいきなり飛び込んだ事務局の後藤さん。「きょうちゃん(らでいっしゅぼーやの会員さんのお子さん、4才)が今後も当社の商品を食べ続けて、将来健康な身体で赤ちゃんを産んでほしい。そこまでの愛情を持って取り組んでいきたいと思っています」と話していたらでいっしゅぼーやの田原さん。「チャイム

を鳴らさないのにトラックの音で、お母さんにお子さんまで出て来てくれる。嬉しいですよ」野菜と愛を配達しているという若者大塚さんは、将来農業がやりたいらしい。

何も分らずに参加した九州集會、掘割エイト(どんこ船で速さを競うタイムレース)が終わるころには、参加者たちは打ち解けはじめ、ビールを飲みながらの川下りですっかりリラックス。その後、夕食、二次会、三次会へと進むにつれ盛り上がりを見せた。

同じテーブルだった、もっこす倶楽部(熊本)の井上さんは、若手の中でも超若手。現在22才で彼女募集中。「将来、東京方面への出荷を増やしたい。一番の理想は自分のレストランをつくること。井上さんのお父さんは現在52才で、60才になったら井上さんに経営権を譲るそう。高橋商店(福岡)の高橋さんも、井上さんに負けずとも劣らぬ夢を持っている。「ゆずすこ(液体版ゆずししよ)を世界に売りたい。ヤンキースタジアムのホットドッグにかかっていたら最高だよな」。

また、真南風(沖縄・宮古島)の西川さん



グループワークテーマ
『Happy Project』
九州の魅力、各産地の魅力を伝えるには？
スケジュール：1日目 集会 / 「水郷柳川 夏の水まつりスイ！水！すい！」参加 / 掘割エイト競漕 / 温泉 / お堀の夕べ / 交流会 2日目 早朝の有明海で月の引力見学 / 有明海を育てる会会長 近藤潤三氏講演 / グループワーク / 閉会後のオプション 高橋商店さんの工場見学

「現場で起こっていることを伝えていきたい」と話し「お父さんが育んできた土地をそのまま守っていかなければならない」と話すのは、一つ上のお兄さんとともに奮闘中の鹿児島有機の園山さん。九州の生産者はシャイな人間が多いけれど、じっくり話を聞いてみると胸の内にある熱い思いが溢れ出てくるのがわかる。みなさん真つすぐな目をしていて、それは自分の生き方にゆるぎない自信を持っていることの表れのように思えた。

つくる人も売る人も買う人も、みんなが喜び合える関係性がここにはある。誰もが誤摩化すことなく正直でいられるのだ。今、世の中は不安定の流れのなかにある。「ピンチは大きなチャンスです。この苦しさを明日へのチャンスに変えて欲しい。九州集會という出会いの場から、それぞれが故郷に何かおみやげを持ち帰ることを心から願っています」とは、Radixの会理事、水の子代表上村さんの言葉。この言葉通り、きつとここに集まったみなさんは、もうすでに何かをはじめているに違いない。

(※)らでいっしゅぼーや：生産者のありのままを、生産者の立場からお伝えする雑誌。Radixの会が2008年春と秋にチャレンジ発行した。



Mariko Yoshimura
吉村 真理子
ライター
福岡在住。フリーでライターをしながら、定年後畑をはじめて両親の手伝いを時々する日々。将来、畑の中にセルフビルドでカフェをつくるのが夢。



東北

2004 ~ 2007



米農家が多く、稲刈り前に開催する。“まずはじっくり語り合う”から始まったが、遠野の集会後の有志サッカーが呼び水となり、スポーツ交流がほぼ必須となる。若手4名が世話人となって「みんなで自炊」や「グループワークからSNSへ」など自主運営に向けて模索中。

ワカモノたちは熱かったか？ 体感！ 東北若者集会

2008年東北若者集会に参加していただいたお二人の方に、肌で感じた若者集会を語っていただきました。

Kenji Yamamoto Radixの会の若者たちに恐れ入る

農産物流通及びITコンサルタント
(株)グッドテーブルズ代表取締役
山本謙治さん

僕は、Radixの会は有機農業に関するもの凄い教習を蓄えた集まりではないか、と考えている。
彼らは年に数回、各地で勉強会を行う。有機農業の技術は、通常の化学肥料・化学合成農薬を使う慣行農法とは違つので、全く体系が変わつてしまふ。残念なことには日本の農学のアカデミズムの世界で有機農業はまともな扱われてこなかった。従つて試験場やJAの営農指導員が有機農業を指導することはほとんどない。だから有機・特別栽培の技術は、独自の体系をつくつていくしかなかったのである。
ここ15年くらいで世の中が変わり、特

別栽培品は若干増えてきた。けれどもその技術体系の礎を作つてきたのは、いろいろな攻撃に遭いながらもジツと耐えてきた有機農家たちなのだ。Radixの会も、その流れを創つてきた大きな一派なのである。
そして、そのRadixの会の若手生産者が交流する会があると聞き、秋田県大潟村に飛んだのである。
Radixの若手農業者の層の厚さ、そしてパワーには恐れ入った！ みな、実に個性豊かであり、自分の創つているモノに対する自信と誇りを隠さない。今ここにいる連中だけを観ると、後継者不足つてなんだよ？ という気にすらなつ

Yuriko Tomita 自分たちが面白いから頑張る農業

NHK秋田放送局
放送部ディレクター
富田百合子さん

前向きに真剣に農業に取り組んでいる若者達が、あれだけの教習まっているのを見たのは、仕事でもプライベートでも初めてのことでした。全てのお話や光景が、刺激的で興味深い2日間でした。
私は、秋田でテレビの仕事始めて5年目になります。これまで過疎集落や林業などを取材することが多かったのですが、その中で、農村の今後について後ろ向きに考えてしまふ癖がついてしまつていました。農業者って凄く大変そう！

耐えてそう！若くして就農する人って真面目な人が多そう！……そんなイメージが自分の中で先行してあつたんですね。でも実際、若手の皆さんと話してみると、農業って凄く大変なんだということとは間違いないと思ひますが「農業真剣にやっています」は決して堅苦しいものではなく、辛いものでもなく、自分たちが面白いと感じるから、農業を頑張る。それは、私たちが仕事を頑張ろうとするモチベーションとそんなに変わらないもの

なんだなあ、という……当然のことなのかもしませんが、そんなところに気付かされました。そして、会に参加していらつしやる配送スタッフの皆さんの意識の高いことにも驚かされました。全ての皆さんの話から、前向きに取材をしていくヒントとパワーをいただきました。
Radixの会のこつとした取り組みは、今後ますます重要性を増してくると思ひます。本当に素敵なイベントでした。ありがとうございました。

てしまつから不思議だ。日本の各所で超・高齢化している農村を廻つている僕なのに……。
しかもいいな、と思つたのは、配送会社の人がまんべんなく入つてのことだ。らでいっしゅばーやの配送は、配送会社同士の繋がりも濃い。各会員の自宅へ個配を行う配送スタッフは、いつてみればらでいっしゅばーやの顔そのものである。会員にとっては、配送スタッフこそが、らでいっしゅばーやとのインターフェイスなのだ。その彼らが、積極的に商品や生産者の情報を届けようとしている。「我々がもっと生産者さんのことを識れば、それを伝えることができるんですよ！」ですから、いろいろ教えてくださーい！という姿勢を持つ配送スタッフが多かつたこと多かつたこと。
自分の仕事に誇りを持っていないような状況に追い込まれている人が多い中、配送スタッフの生き生きとした顔は、かなりまぶしく格好良く写つたのである！
らでいっしゅばーやを支える生産者団体であるRadixの会、もっと親しくなりたいものだ。そして、今回最も感動したのはらでいっしゅばーやの配送スタッフたちの思いだ。今の日本にこんな仕事をする人たちがいるんだろうか。
彼らに家に来て欲しいから、やつぱり僕もらでいっしゅの会員申し込み、しなきゃな。そう思つたのである。
ブログ「やまけんの出張食い倒れ日記」より



2005 東北集会

2005年9月3・4日
山形県東田川郡三川町
参加人数：41名



グループワークテーマ
『地域の課題を共有しよう、地元を
越えて仲間とできること考えてみよう』
スケジュール：1日目 集合/スポーツ交流
(バレーボールとソフトボール) /温泉/懇
親会 2日目 グループワーク



2004 東北集会

2004年9月3・4日
岩手県遠野市
参加人数：54名



グループワークテーマ
『自分の宝 地域の宝
…大切にしたいもの』
スケジュール：1日目 集合/八木澤商店
河野和義さんより激励の言葉/グループ
ワーク/懇親会 2日目 各チームごとに若
者集会の感想を発表/閉会後のオプショ
ン サッカー・八木澤商店さん見学

みんな熱い、熱すぎる

スポーツして飲んで温泉入って仲間をつくる…。男女混合ビーチバレーは、ボールが破裂するほどの熱戦。手作りゼッケンはハンカチと安全ピンで。農産部後藤部長（当時）、和歌山から参加の紀の芽の会達壺さん（当時Radixの会会長）らセンパイも入り乱れての大宴会に、会場は出入り禁止になったとか、ならなかったとか。東北若者集会中もっとも「若いチカラ」が爆発、距離もぐっと近づいた回。



打ち解けるきっかけはスポーツ
テーマはスポーツ。前年の遠野での集会後、生産者の自宅にサッカー場があり、有志でサッカーをやったところ「やっぱりスポーツ」と熱望されての実現でした。晴れたらソフトボール、雨ならビーチバレーの予定でしたが、明け方まで降った雨により体育館での「東北Vリーグ」に、41名が6チームに分かれての総当たり戦は、1チーム3試合と相当ハードながらも、大いに盛り上がりました。グラウンドが少し乾いてきたのを見てると、即ソフトボール大会が始まります。「試合をこなし、ふと体育館を見ればバスケットボールもしている。時間さえあれば身体を動かしたい、これが若者なのでしょう。そして、1年ぶりの再会を祝した懇親会。初参加の面々もスポーツを通して生まれた仲間意識からか、すぐに打ち解けていまし

た。なかでも、今年も持ち寄った「東北のお酒と常備菜」の中に「オヤジが造ったドブロク」が登場し、気づけば壮絶な盛り上がり…。2日目のグループワークでは、未来のことについてディスカッションしました。「地域での課題、そしてその解決の糸口は？」そんなテーマに取り組みます。各チームからの発表は、「地域や人とのつながり」から、「学校教育」「格差社会」などにもおよびました。若者たちが持つ問題意識に都度、地方の差異はなく、社会全体の課題なのだとも認識しました。「またスポーツをして、みんなで心を開いて話したい」「配送スタッフと交流したい!!」こんな要望を取り入れながら、次回は若手が自分たちの力で企画から運営までできるようにと、世話人を選出し準備していくこととなりました。

一人じゃない心強さを感じた

手探りで始まった初の若者集会
「いま何考えてる?」「なんで百姓やってるの?」「自分たちの思い、足元のくらし、東北の食文化、取り巻く環境を振り返り、分かちあったら、そこから見えて来る「宝もの」がきっとあるはず。まずは、地域を越えて若いモンが、知り合う→語る→飲む→仲間をつくる、そのきっかけ作りとして開催されたRadixの会初の若者集会。参加資格は39才まで。40才以上はギャラリ―として会のゆくえを見守ります。総勢54名を5チームに分けてのグループワーク。「自分の大切にしているもの、自慢できるもの、地域で大切にしたいもの」「それはなぜか」を語りながらの自己紹介。そして「その中で生産者、らでいっしょぼーや、消費者が共有していけるものはなにか? どう広げていけるか」を話し合い、翌日各チームから発表してもらおうというプログラム。初対面どころまで話はずむのか……。懇親会では、遠野地方の伝統料理が並び、参加者が各自持参した「大スキなうちのおかず」と「東北の銘酒」を披露しあって、心もゆるみ、夜が更けるまで語りあう若者も。その成果か、翌日の発表前の最後の詰めは各チームとも熱が入ります。それぞれ個性ある思いの表現が展開されました。「働く場所、生活環境が違ってても、個々の心の奥では同じものを持っている、目指しているものが一緒だ、ということがわかって心強かった!」「自分一人じゃない心強さが、明日からの何かを変えてくれそう」。参加者の誰もが胸に抱いたようでした。「農業やっつてるみなさんはイキイキい願してるねえ。こんな時代に、オレは百姓だ」と声高き言いながら農業をやっているもらいたいね」陸前高田にこの人あり。地域おこしの立役者、宝さがし、食の地産を体現されている八木澤商店の河野社長が、ゲキを飛ばしてくれました。



八木澤商店河野社長（現Radixの会会長）から「食の地元学～地域の宝もの探し～」についてお話を伺い、グループワーク。「大切にしたいものは?」初の試みや空気は堅め。懇親会では地元の逸品や我が家の常備菜を持ち寄ってもらった。気づけばチェキ（懐かしい）と漬物のコラージュが出来上がり、空気も和やかになっていた。





2007 東北集会

2007年8月31日・9月1日
山形県酒田市
参加人数：41名



グループワークテーマ
『私たちのことを伝えて、モノや思いを支持してもらうには?』

スケジュール：1日目 集合/らでいっしゅばーやのしくみ、ばれっとを学ぶ/スポーツ交流(食材争奪障害物競走、らでいっしゅ実力テスト)/温泉/チーム毎の晩ご飯自炊/交流会 2日目 チーム毎の朝ご飯自炊/グループワーク/閉会後のオプション ドリームズファームさんの田んぼ見学



写真：成神利美

2006 東北集会

2006年9月1・2日
青森県平川市
参加人数：38名



グループワークテーマ
『第一回“ヤルキング”決定戦』

※ヤルキング：自分史とその時々モチベーションを折れ線グラフで表す

スケジュール：1日目 集合/スポーツ交流(フットボール)/温泉/交流会、Radicaleの会より配送現場紹介 2日目 グループワーク/閉会後のオプション 新農業研究会さんの圃場見学

団結力。知る、考える、続ける力

交流の輪がどんどん広がる
冬の若者集会では生産者が作ったご当地鍋が好評でした。そこで世話人から「今度は配送スタッフとともにメニューを考えてみるのは?」と提案があり、この若者集会では「自炊を通じた交流と考察」を目指しました。
場所は、鳥海山麓にあるログキャビン。合宿でも利用されるこの場所は、自炊を行ない夜更けまで語りあつのに最適です。
41名の生産者、配送スタッフ、水産加工メーカー、らでいっしゅばーやの営業スタッフと、多方面からの交流が実現しました。
今回は初心にかえり、らでいっしゅばーやを知る時間を作りました。基幹商品である野菜ボックス「ばれっと」を開けながら、配送スタッフが内容を説明。次に、らでいっしゅばーやをまだ知らない消費者にどのように伝えていくのか、営業スタッフが寸劇を披露。また、スポーツ交流では、競技にプラスして、らでいっしゅばーやに関する実力テストも導入。総倉得点の結果でメイン食材(短角牛、放牧豚、豆など)の選択権を得られるとあって「体力がなくても誰でも参加しやすく」と考案した障害物競走のほが、過去のどのスポーツよりも白熱してしまいました。
「飯作りで生産者と営業と配送スタッフが協力して、笑いあい、考えながら過ごす時間が有意義だった」となかなか好評でした。
お互いをより深く理解するために
翌日のグループワークでは、世話人富田さん(ベジタブルスタイル)の進行のもと、配送スタッフからの質問を軸に展開。「らでいっしゅばーやの厳しい基準での栽培を諦めようと思ったことは?」という質問には「二度もない」「後押ししてくれる消費者の方がいるからあきらめないで続けられる」という返事が。「いろいろな制限を乗り越えることが逆にやりがいになっていると聞き感心した」と配送スタッフにもプラスになりました。

(※) 冬の若者集会：「東北若者集会冬の陣」として、作り手が都市部にやっできて、配送の現場を体験し、配送スタッフとの交流を図っている。P.19参照。

そのつながりに深くかかわりたい

自分たちの手で企画・運営
会場は青森県。新農業研究会の地元です。東北で3回目の開催となるこの年、「次の段階では、若手が自分たちで企画運営できるようにすることが理想(伊藤幸蔵さん・Radicaleの会副会長)」という課題に対し4名の若者が世話人となり準備を進めました。
スポーツ・交流・グループワークを踏襲することが決まり、種目はフットボール(第一希望はサッカー)しかし会場がなく断念、グループワークのテーマは「第一回“ヤルキング”決定戦」と題して、各自が自分史「ヤル気ハロメーター」を作成しながら語っていくことに。世話人がリーダーとなり、一泊2日を引っ張っていきます。
参加生産者は24名。畜産、水産、加工の各Radicaleの会会員や、北海道地区にも声をかけたものの、残念ながらタイミングが合わず農産のみとなりました。しかしながら配送



スタッフ(ラディクルの会)が8名、首都圏と神奈川から参加! 交流会では配送現場紹介のスライド上映も行われました。
配送スタッフとの新たな絆
「配送する量がすごい!」「みんながんばって配送している」「生産者の作物を配送のみんなの努力で届けてくれてることに感謝」「配送スタッフが自信を持ってお客様に薦めることができる、安全ととにかくウマイものを作らなければ」等々、新たなやる気につながっているようでした。
ラディクルの会が参加し、配送スタッフと生産者がつながったことで、顔の見える関係が見えに来てくれた。次は俺らが配送の現場を見に行こう!と、東北の農作業が一段落する冬に東京に集まることを約束して、再会を誓ったのでした。



オールらでいっしゅ食材の自炊に挑戦。共に何かを作ることで絆がさらに深まる。東北初のメーカー参加(水産加工)もあった。スポーツは誰もが参加できるようオリジナル障害物競走とらでいっしゅ実力テストを考案。集会后配送スタッフは庄内平野の田んぼを見学。

九州

2005 ~ 2007



柑橘や果菜、根菜類の産地が多く、真夏の開催が多い。各産地が持ち回りで幹事を務める。「汗かいて、飲み方やって、はじめて未来とか語るとです」と、スポーツ交流・バーベキュー・翌日の講話で構成する。農産のみならず加工品、水産加工メーカーさんの参加も多い。

WAKAMONO VOICE

饒舌じゃない？ つたない表現？ これがオレたちのリアルなんだ！
(2005～2008若者集会アンケートより)

配送スタッフの「思い」と「ジレンマ」が印象的

生産者→消費者の意識はあるけど、それを届けてくれる人がいないと成り立たないんだよね

集会の日、その日だけで終わらせたくない

ただ配るだけじゃない。作る人の頑張りと努力も運んでいるんだ。僕らが心を込めて作ったものを、配送スタッフさんが気持ちを入れて届けてくれる！

農業後継者、数年後には現在の4割になるって聞いて正直驚いた。平成生まれの生産者さんがいたのも驚いた

同じ思いをもった生産者、とくに自分よりも年下の人たちとの会話が新鮮だった

互いに知らないってことを知れる

生産というスタート地点から営業、配送というゴールまでが実感を伴って伝わった感じ。自分が営業したお客様の、その後の世界を知れて発見の連続

もっともって意見や思いを伝え合い、今まで以上に交流を深めたい

汗かいて飲んで語って勉強する、素晴らしい！

彼らの目が輝いていることに少しうらやましさを感じます

熱い思いをシェアしよう！

帰ったら、若いヤル気のある人がたくさんいるってこと伝えたい

農業のたいへんな面を初めて知って、野菜に対する考え方が変わりました

自分たちの作ったものを届けてくれる人のことを考えたことがなかった。話ができてよかった



人生を「がんばろう」って思ってる方々とお話できた。普段は意外と少ないから。

お互いの意見を交換しあうことが、すべての改革・変革への第一歩だと感じた

農業はクリエイティブな仕事なのだ

配送スタッフさんとの話しは新鮮で、「またがんばっていこう」という思いのビタミン剤になりました

作る人の気持ち、意気込みをもっと知り届けるときに活かしたい

大変なときもあるが辞めようとおもったことはない。農業は仕事としてというより生き方として選んでやっているから

いくら良いものやこだわったものを作っても売れなければほかのものと同じ

飲みでいろんな人々と農業の話聞いたことが一番よかった。日本の自給率についてとか、とてもまじめな話、討論がすごくおもしろかった

元気な農家がいっぱいいるからもっともってがんばろう

自分ももっと勉強しなきゃな

こんどは全国で集まろう！





2006九州集会

2006年8月26・27日
宮崎県西都市
参加人数：58名



スケジュール：1日目 集合/スポーツ交流 (ドッジボール) /温泉/バーベキュー 2日目 石井記念友愛社見学/生産者の話/閉会後のオプション 宮崎有機さんの圃場見学



2005九州集会

2005年8月28・29日
熊本県八代郡氷川町
参加人数：52名



スケジュール：1日目 集合/スポーツ交流 (バレーボール@レンコン畑) /温泉/らでいっしゅ食材によるバーベキュー 2日目 自炊で朝食/水の子会代表上村茂則さんの講話

語り合う時間がまだまだ足りない

熊本での泥んこバレーに触発され(?)「次はうちでやるっちゃね」と宮崎有機農業研究会青年部会が幹事となつての開催。ドッジボール、バーベキュー、そして翌日は「僕らがいるのはこの人のおかげだからぜひ見てほしい」と明治期より孤児を預かる石井記念友愛社を見学。関西、中部地区から配送スタッフも初参加したこの回、「もっと真剣に語り合う時間がほしい」と気温も気持ちもヒートアップ。



届ける人との距離が一気に縮まる
前年に好評だったスポーツからスタート、種目は男女混合ドッジボール。「ゲームはこの日限りの大橋ルール(幹事の一人大橋さん考案)で、夜の交流会は野外バーベキュー」と宮崎有機農業研究会の青年部会メンバーが幹事となり、準備がすすめられました。
集まったのは生産者39名、加工メーカー6社7名。「農産物だけではない業種を越えた集會を」という若者集會の目標に、また一歩近づきました。さらに、らでいっしゅばーやの配送スタッフ8名が大阪・中部などから参加。Radixの会長・河野和義さんの語る、ぶたつのRは両輪 (RadixとRadice)、その一歩めが踏み出されたのです。
ドッジボールの汗を温泉で流し、交流会で語り合った翌日は、地元の歴史を学びに石井十次記念館「友愛社」を訪ねました。
石井十次は明治期に2000人もの孤児

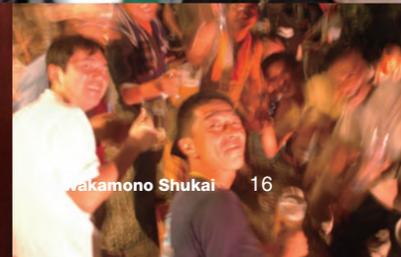
を預かっていたという児童福祉の父といわれる人。「木城に来たならせつない見てほしい。ここがあるからいまの自分がある」と幹事からの推薦です。
2日間の締めくくりは友愛社の一室で2006年若者集會を振り返りました。前年、唯一宮崎から参加し「次回はうちで開催するっちゃね」と誘致(?)した宮崎有機の小泉さんが進役。
「真剣な話し合いがよかった。もっと時間があればよかった」「晩飲み明かすことで生産者も、配送スタッフも何の隔たりもなくなった」「自分の仕事に対するモチベーションが上がった」「異業種でもモノ作りや仕事に対する熱意は同じ」「これまで生産者と消費者を中心に物ごとを考えていたが、配送スタッフが大切な架け橋なんだと思った」など、生産者と配送スタッフの距離が大きく縮まった若者集會でした。

バカバカしいほど一生懸命

意識がつかなくて生まれる力がある
「若いもんは汗かいて飲み方やってはじめて未来とか語るんです」と九州ブロック委員の北原さん(水の子会)の呼びかけで実現した九州若者集會。台風で中止となった前年のリベンジ、と集まった生産者・スタッフは52名、6チームに分かれてレンコン畑でのバレーボールに挑戦です。レンコンのコンテナを観覧席に仕立て、日除けシートをフオークリフトで張り、審判席は脚立にバラソル。幹事の水の子会さんの準備はさすがでした。
試合は、初めこそ顔が汚れないよう控えめなプレーでしたが、「二戦目には頭からダイブ! バカバカしいほど一生懸命。初対面でも戦友のような関係が生まれていました。
温泉で汗を流したあとは、九州各産地の食材や持ち寄った焼酎でバーベキュー。古民家の宿で、農業のこと、仕事のこと、日本の未来のことなど、夜が更けるまで討論しました。
翌朝は、水の子会上村代表から農業を超えた環境への取り組みなどのお話。「みなさんなりに地元でできることが必ずあります!」と若者たちを応援してくれました。
「若者独特の和気あいあいとした集會。プレーを通してたくさん仲間ができる、すばらしい会でした」「自分と同世代のみんなが農業をどうという目で見て考えているのか、もっと話せたらもっとおもしろいなあ」など初めの九州若者集會も好評です。
「各地区のブロック委員の皆さんのおかげで若者も大勢集まり、絆を深めることができました。予定通り(?)飲み方では、農業の未来について語ることができました。いろいろな悩みを吐き出し、熱い思いを語り、気持ちを共有することの大切さを感じました。今後それぞれの地域性を出していければワクワクするような企画ができると思います。九州もやっときゃやっぞー」とは北原さん。無事に開催できてホッとしていました。



台風で中止となった前年のリベンジとあって、幹事の水の子会さんの準備は完璧。レンコン畑での泥んこバレーは、初顔合わせの緊張を吹き飛ばした。宿泊は山の中のログハウス。夜更けまで酒も話もすむ。翌朝は水の子会の上村代表から、無農薬栽培への転換と周囲からの圧力、環境保全活動へかける思いなどを伺った。



2007九州集会

2007年7月20・21日

長崎県雲仙市
参加人数：54名



スケジュール：1日目 集合/スポーツ交流(ランドゴルフ)/バーベキュー、情報交換会(ばれっと説明、お届け風景ロールプレイング)
2日目 長有研 近藤代表、ながさき南部 近藤代表からのお話「環境保全型生産の今昔」と参加者の意見交換/閉会後のオプション ながさき南部さんの圃場研見学



届ける人と作る人がつながった

Radicleの会会長 市川一紀

Radixの会



モノを運ぶだけの配送ではない！会員様からの「ありがとう」は、らでいっしゅぼーやを作る全ての者に言っていたらいい、それが私たちのプライドです。思いをつなぐ配送をしている。しかし、作る人のことを本当に知っているのか？

2006年の食の文化祭で、その疑問は「双方片想いだっただ」ことに気づきました。理解し合えていると思っていたが、実はそうでもなかった。それでも、互いの情熱は信じられる。それが若者集会参加につながり、今につながる全てのスタートだったのです。

あれから3年が経ちます。作る人との交流が一步一步深まり、「RadixとRadicleは両輪」この言葉が当たり前になってきました。作る人と届ける人がこんな一体となっている、互いの仕事を尊敬しあう流通団体は他にないと思っています。でもまだまだ物足りないという声もあがっています。

私たち全ての配送スタッフが「ホンモノ」をお届けことにプライドを持ち、食べる人へつなぐ役割を果たす。らでいっしゅぼーやファンを増やして、良い食の未来を作る一端を担い続けられるよう、これからも作る人たちの現場にどんと足を運びます！

明るい未来は自分たちでつくる

らでいっしゅぼーやをもう一度認識
前年から配送スタッフも加わり、作る人と届ける人の両輪が回り始めました。一方、仕事は所属団体への納品までなので、どのように消費者の手元に届けられるのか想像がつかない、という生産者がたくさんいるのも事実。そこで「らでいっしゅぼーやとは？」を改めて確認したいと考えたのが2007年の若者集会です。らでいっしゅぼーやの基幹商品である野菜ボックス「ばれっと」を開けながら「これは大家族向け、こちらは一人暮らし向け、何が入っている、この値段と配送スタッフが説明。お届け現場の寸劇も「自分たちが作った野菜がどのようにして消費者に届くのかよく分かった」と好評でした。

2日目は、ながさき南部の近藤一海代表と長有研の近藤正明代表のお話。30数年来、日本の産直・有機農業をリードするお二人から「この年収なら農家に後継者ができる」数年

手書きのゼッケンを携え、霧の中でのランドゴルフを楽しむ。配送スタッフが、「ばれっと」などのお届け風景や、新規会員獲得の営業風景などを披露。らでいっしゅぼーやの最前線を知ってもらった。翌日は九州を代表する二大団体「ながさき南部生産組合」と「長崎有機農業研究会」の代表お二人から有機農業の30年を語っていただいた。終了後配送スタッフはみかんやオクラの圃場を見学。



後には現在の農業従事者の6割が減る」といった農業の現状が語られ、「思い」だけでは解決できない現実も再認識しました。

消費者との接点を彼らが握っている
幹事の金井さん(ながさき南部)の進行で進められたディスカッションでは、配送スタッフから「会員さんに、ヘタの茶色い柑橘は古いのでは？と質問されたが、どう説明すればよいか」との質問も。そこから、作る側と消費する側の常識の違いも見えてきました。

「直に苦情を受けたり苦勞も多い中、前向きに配送の仕事をされている。彼らの負担を軽減できるよう、生産者の一層の努力も大切」想像以上に作るのたいへんさを知り、もっと早く、もっと確実に届けようという使命感が増したと、お互いを尊重しあい、つながりが深まっていく中、目的を共有することの重要性に気づかされた集会でした。



始まりは桜中学での食の文化祭。実はお互い現場を知らなかった、でもムスカンイこと抜きにまずは交流を深めていこう！と若者集会参加につながった。

知りたい！知ってもらいたい！ 2006・2007 東北若者集会冬の陣

2007年2月2・3日

東京都板橋区
参加人数：78名
参加団体：16団体

2008年1月25・26日

神奈川県厚木市
参加人数：81名
参加団体：20団体



2006



2007



お互いの現場を行き来するもう一方が東北集会冬の陣。作る人が配送センターに出向き、夏に参加できなかった多くの配送スタッフ&らでいっしゅぼーやスタッフと交流する。サッカー、鍋大会、食リピックのほか、会員様からの質問に答えてもらう、想いを語り合う、など楽しみながら、かつじっくりと交流を深めています。

作る人が見に行きました

届ける人の現場を体験

お互いの現場を知ろう！との思いから、作る人の配送体験も実現。過去2回のべ34人が参加。タダの配送じゃないことを実感。



『自分の作ったモノをとても大事に扱ってもらい、笑顔で対応していることに感銘を受けた。互いの思いが交わりました。』



顔を合わせるから発展する 未来を創造する力

Radixの会副会長 伊藤幸蔵

刺激し合い切磋琢磨する

「Radixの会」役員になった2004年。最少役員だった私が、最初に取り組んだプロジェクトが若者集会でした。

私が代表を務めていた組織でも、若手（20〜30代・当時私も30代でした）が中心の活動を行っていましたが、更なる成長のために「がんばっている農家に会わせてやりたい、他地域で活動している若いやつらもきつとそう思っている、彼らが知り合う場をつくるべきだ」と考えたのがきっかけでした。

「若手農家・後継者」は地域では金の卵、しかし磨かないと光らなくなる。「何のために努力し、農作物を作っているのか」「消費者に食べてもらいたい、の先にあるものは何か?」。自分の目的を見つけるためにも、多くの人と会い、話しをし、刺激を受けて切磋琢磨して欲しかったのです。

農業はともすると自分や自分の組織、地域だけで完結しがちです。農家が自分たちの足で立ち、レベルを上げようとするとき、ともすると自分の立ち位置を見失いかねない。だからこそ外からの刺激を受け続けなければだめなんだ、と。

不安もありました、「若いやつが集まるのか」って。でも、ふたを開けてびっくりしましたね。

「会っ話す分り合う」から次のステージへ

1・2回目の若者集会には言わば顔合わせでした。しかし3回目からは一歩前進し、自分たちで企画・準備・実行するための世話人を選出。その世話人たちが核となり、自主運営を模索しました。

他の地域との交流は、自分が気づかない地元の宝

し合いにならない、楽しさや希望を語れるこの若者集会には、すばらしい場だといえるでしょう。

実を伴なう会に

若者集会を通じて、他者を認め、自分たちの良いところや欠点に気づく、その宝もの探しは今も続いています。そして「宝もの」というとき、「いい話」だけに留まらない「お金も大事だろ」と言えるパラメータも生まれています。「思い」と「経済」をうまく両立させ事業に結びつける、さまざまな活動につなげる。そこには後継者不足や食の安全、環境、自給率等へのさまざまな切り口もあり、チャレンジしがいがあります。悩みながら力をつけるなかで、若者たちが世代交代し主力に育っていく。これが今後の若者集会の狙いのひとつなのです。

ものを認識し、自分がやっていることを人に伝える訓練にもなる、つまり自分を高めるネットワーク作りにもなるのです。

回を重ねることで、「自分は何が足りないのか、何が強みなのか」というテーマを共有し「どう活かすか、何をしたいか、何ができるか」をアピールするための企画までできるようになりました。若者集会はそのをどう具体化していくか、という次のステージに入ったのだと思います。

行動力と柔軟性は若者の特権

「配送スタッフと話す」という企画も、若者集会の中から生まれました。

かつての産直（生産地と消費地・農村と都市）という「農家と消費者」から、「産直

組織と流通組織」のつながりが主流になり、「食べる人」という目的が後回しになりがちなることも事実です。だからこそ農家・流通を含め、その先の届けられる人々（物流会社）までがつながることはとてもすばらしいことです。夏は農村に来てもらい、冬は都市に行く。「自分たちが作った成果を届けてくれる仲間」という連帯感が生まれました。

実は、私たち生産者は「作ったものを、らでいっしゅぼーやの人たちが手渡しで届けてくれ、言葉も交わしてくれている」と想像を巡らし、理想の絵を描いていました。しかし、実際に配送スタッフの仕事を見て、「たいへんな仕事」「自分たちが作ったものを大切に扱ってくれている」という実感と同時に「ほとんどの会員さんに会えない」「話せない」という現

そして、今年からはらでいっしゅぼーやの会員さんにも参加してもらいました。このように業界関係者だけでなく、つながりが広がっていいのもいいでしょう。流れがないと激みます。思いを持った人にはどんどん入ってきてもらい、裾野を広げていってほしい。職業、地域を越え「これから何を目的にするのか、目標にするのか」を明確にイメージできるような会に発展してほしい。そして「若いやつらが集まって、思いを共有し、実現できた」という、実が伴なう会に育ってくれたらと思っています。

未来を創造する力

とはいえ、走り続けるのは難しい。変える必要があるのか、このままがいい、という思いも出てきます。大切なのは、刺激し合い行動に移せるかどうか



写真：山本謙治

農家に人材がない

Radixの会常務理事・事務局長 後藤和明

「都会と比べると、農家に人材がない!」
10年前の自分の正直なつぶやきでした。
それが、先駆的親父農家と基準を作り、減反に反対し、酒を酌み交わし、若い後継者が増えていって、「ワザ・ヒト・アンテナ」から力をつけてきたのです。
13年目の今、Radix若者集団に脱帽!

らでいっしゅぼーや設立当初、生産者は「百姓の自立」や「顔の見える有機農業の可能性」について、瞳を輝かせながら語ってくれました。その当時の先駆者達ももう60代。地域の熟成したリーダーとして、柔和な顔と笑みが似合うようになっています。態度も口も悪かったその当時の生産者は、今にして思えば意識が高く、とてもかっこよい存在でした。

らでいっしゅぼーやは20年の歳月において、100回以上様々な集会を行なってきました。『「森と海は恋人」植林から水産養殖』、『ザッツ国産「DEVANDA運動」』、『畜産自給飼料』、『自主基準づくり』、『生産技術勉強会』等々。

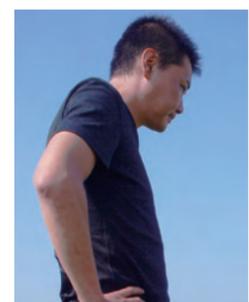
その背景には、率先してどんどん参加してくれた、当時若かった団塊の親父農家の存在がありました。そして、その後女性集会や若者集会を企画し、肩に力を入れずに楽しく始められたことにもつながっていったのです。

有機農業に対する認識が都市と農村に広がった理由の一つは、当時の消費者側の若者たちも、同様の関心を有機農業に寄せていたからでしょう。その意識から大きな共感が生まれ、社会化していったのだと思います。

2000年以降、JAS有機や認証、トレーサビリティ、BSE、鳥インフルエンザ、ポジティブリスト制度、遺伝子組み換え作物、WTOやFTAの動向等々、生産側に課せられる課題や要求は増え、勉強や情報共有の必要性が高まるばかりです。そんな中、副会長伊藤幸蔵氏（当時36歳）の呼びかけで多くの活動が始まり、広がりました。

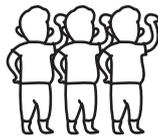
酒を飲み交わし、大いに語り合っ仲間を増やすことも、若き後継者には大切なことでしょう。しかし、各地の生産者が、地域の宝もの（資源）を掘り起こす精神が育ってきたこと。そして、配送スタッフであるラディクルの会とつながることで、らでいっしゅぼーやの会員さんにどうしたら喜んでもらえるか、と両方で考えはじめたこと。これらが若者集会の成果であり、私たちスタッフの喜びなのです。

Radixの会員になって良かった。らでいっしゅぼーやの会員になって良かった。Radixの会は、地域に誇りを持つ若者集団で日本地図を埋め尽くしたい。そんな夢を共有し、感動しあえる組織を目指して、共に歩みたいと願っています。



伊藤幸蔵
米沢郷グループ（ファーマーズクラブ赤とんぼ）代表
1967年山形県生まれ。
Radixの会東北ブロック委員を経て2004年役員理事に。
現在Radixの会副会長。

であり、考えても行動に移せなかったらそれは考えていないのと同じで、より罪が深いことです。
一人ではない。これまで自分たちが知り合った人たちと、どういつかうに手を携えて変えていけるか。東北や九州から始まった若者集会が、未来をいい方向に変えていく力になる。それこそが若者集会のだと思つのです。



**WAKA
MONO 01**
図解「若者集会」

2009年1月7日発行

Producer 後藤和明 (Radixの会事務局)

Editors 島田晶子 (Radixの会事務局)
西村郁子 (フェアリーダスト・オフィス)

Design フェアリーダスト・オフィス

Radixの会

らでいっしゅぼーや環境保全型生産者団体

〒175-0081 東京都板橋区新河岸1-15-9らでいっしゅぼーや内

TEL : 03-5399-4631 FAX : 03-5399-4634

E-MAIL : office@radix-jp.org Web Site : <http://www.radix-jp.org>